

幻の領土問題(2019・1・6)

★安倍首相は在任中に北方領土問題を解決し、歴史に名を残すことに意欲を滲ませている。この問題は歴史的経緯や国際法上の解釈、国民感情などが絡まり、一筋縄ではいかない。

★古来、領土は戦争によってしか解決出来なかった。1mmたりとも渡さないというのが、国の大小を問わず国家元首の考えである。身近な例では尖閣諸島、竹島がある。小笠原諸島と沖縄が、戦わずして返還されたのは異例のことである。

★北方領土問題はさておき、シンガポールの領土問題にからむ秘話を紹介する。これは公表された話ではない。40年前、私が政府高官から個人的に聞いた裏話である。

★シンガポールの国土は淡路島と同じ面積しかない。水も自給出来ないため、マレーシアから輸入している。国土を広げ、水の自給体制を築くことが、国の重要課題である。

★国土を広げる対策として、海岸線の埋め立てを進めている。1960年に580km²だった面積が2017年には721km²に広がった。水は海水の淡水化や最先端のリサイクル技術を駆使した下水処理プラントによる再生水「ニューウォーター」の増産に取り組んでいる。しかし、これらは抜本的な解決策にはならない。

★政府が秘かに画策したのは、シンガポールの目と鼻の先にあるバタム島とビンタン島の買収である。両島ともインドネシア領である。バタム島はフェリーで40分足らずの距離にある。

★バタム島の面積はシンガポールの3分の2、ビンタン島はシンガポールの約2倍。この両島が手に入れば、シンガポールの面積は一気に4倍にも広がる。ビンタン島には良質で豊富な水源がある。これを海底にパイプラインを敷設し、シンガポールに引っ張ってくれば水の問題も解決する。

★インドネシアは1万3千余りの島がある世界の島嶼国家である。この両島は首都ジャカルタから見れば、遠く離れた、取るに足りない小島である。経済的に立ち遅れているインドネシアなら、金を積めば売却に応ずるだろうという思惑がシンガポールにあった。

★この構想は今から50年以上前にあったらしい。シンガポールはこの構想を秘めて、1970年代に両島の共同開発に乗り出した。バタム島は工業団地に、ビンタン島はリゾートアイランドに生まれ変わった。しかし現在に至るも買収計画は実現していない。領土を戦争ではなく、平和裏に手に入れることはなおのこと難しい。だがシンガポールもしたたかで、そんなことは先刻承知とばかり、名を捨てて実を取る戦略を取っている。

★私がこの高官(S氏、会社の副総裁)の案内で初めてバタム島を訪れたのは、1980年代の初頭である。その頃島の3分の2は鬱蒼たるジャングルで、人口は15万人程度だった。1995年に工場を建て、その経営に携わった頃は50万人に増えていた。現在は110万人が住んでいる。



★シンガポール政府はインドネシア政府と共同で、バタム島に「バタミンド」という工業団地を開設した。団地の造成と運営はシンガポール政府が担当し、インドネシア政府は土地と労働力を提供した。S氏はシンガポール側の責任者として、このプロジェクトを主導した。

★シンガポール政府のネライは、シンガポールに進出した外資系企業の引き留め策だった。シンガポールは高度成長の結果、労働集約型産業は成り立たなくなり、空洞化の危機に直面した。S氏率いる公社は、バタム島に大規模な工業団地を作り、インドネシアから安い労働力を集め、労働集約型産業の受け皿とする構想を立案した。それが「バタミンド工業団地」である。



バタム島、黄色い部分が工業団地



★バタム島はシンガポール政府が目をつけるまでは、人口6,000人の漁民が住む、未開発の島だった。工業団地の造成でワーカーの需要が高まり、人口が急増した。インドネシアの間で、この島はパラダイスと呼ばれた。賃金はシンガポールより低かったが、インドネシア本島よりはるかに高給だった。工業団地にはモスク(礼拝堂)やドミトリー(宿舎)、キャンティーン(食堂)など生活に必要な施設が完備していた。彼等がパラダイスと呼ぶのは当然だった。

★バタム島にシフトしたシンガポール工場の跡地には、研究開発センターやハイテク産業、さらにはアジアの総括本部(ヘッドクォーター)の拠点として、多国籍企業を誘致する新たな戦略を立案した。これはいかにもシンガポールらしいいたたかな戦略だった。

★私は1995年に、ある企業の依頼で「バタミンド工業団地」への進出計画を立案し、工場を建てその経営に携わった。建設からわずか半年で操業に漕ぎ着け、奇跡的と評された。もちろんS氏の全面的な支援があったからだ。

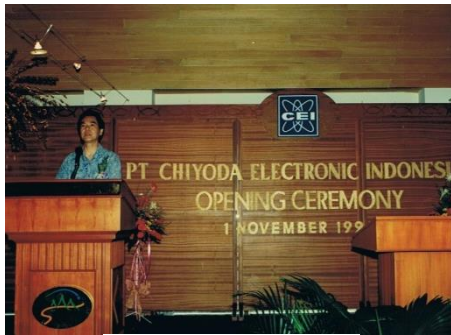


写真は左から建設中の工場、中央は完成後の工場、右は完成後に訪れたS副総裁を囲み玄関ロビーにて。



左は生産設備の搬入、中央はSMTラインのセッティング、右はワーカーとの懇親会の様子

★創業1年後に、内外の関係者100人を招き、サウスリンクスでオープニングセレモニーを開催した。主賓としてシンガポール政府からS副総裁、インドネシア政府からはリアウ州の知事を招き、祝辞をいただいた。



祝辞を述べるS副総裁



リアウ州知事を見送る



地元紙に掲載されたオープニングセレモニーの記事

★ビンタン島には副総裁の好意で、その会社が所有する専用船に乗り、取引先の社長と2人で工業団地の下見に行った。われわれが上陸したのは島の西側にあるロバムという小さな港である。ここに観光客は来ない。水源地も訪れ、その水を飲んだ。うまい水だった。名水として売り出せば、ヒット間違いないよ、と案内役のスタッフに言った。



左から会社の専用船、ロバム港、取引先の社長と会社のスタッフ

